

大衆文化作品翻訳にみる社会・文化・ジェンダー — 花束の韓国語と一輪挿しの日本語 —

佐島 顕子

韓国ドラマの特色のひとつは、日本ならば「黙ってそっとしておくシーン」で、登場人物が実によくしゃべる上、今聞きたい言葉を語ってくれる点である。しかも現実の韓国人も同様で、昨今の政治的日韓関係悪化に気落ちしていた時、「だからこそ我々は一度握った手を離すまい」と知人にあっさり言いつけられ、その口の上手さに啞然とした経験がある。

小説においても、その語りは絶妙だ。日本でも注目されたフェミニズム小説『82年生まれ、キム・ジョン』では、女性主人公に「虐げられた女たち」が憑依する。が、その憑依によって何かの事件を起こすわけではなく、巫女に召喚された霊のようにひたすら「語り続けること」で表現される。復讐をして恨みを晴らすというより、真実を語るために生者の前に現れて正義の回復を訴えるという韓国幽霊譚のスタンダードにのっとった作品である。他者の思いを聞いた責任を負うのは、この場合は読者である。

そんな饒舌な韓国語と日本語の語感の違いも興味深い。韓国語の「空虚だ」は虚無ではなく、「宴の後」すなわち「良いことが終わってしまった」という感覚に近い場合がある。性的禁忌が厳しい歴史があったので、悪罵は英語のように性的傾向が強い。一方日本の性的表現は主として卑猥語で、罵倒語としては「けがれ」禁忌由来のクソゲロ系が多い。それで韓日翻訳の際は英和翻訳と同様、性的悪口はクソツタレ方向に変換して訳出するほうが自然だと感じる。

現代韓国語は漢字を使わずほぼハングルで書かれるので、同音異義語もよくある。ゆえに理解を助けるため、あるいは子音が多く聞き逃される危惧があるため、修飾語や重複表現によって文意を明確にする。それをそのまま日

本語訳すると、くどいほど長く、文意もつかみにくい。例えば「私はあなたがとても好きです。」と多くの言葉をブーケのように集めてイメージを重ねる韓国語に対し、日本語では「好き。」と一言に集約して一輪挿しのように提示したほうが、読者に気持ちの強さを伝えられる。

創作物に現れる会話は現実の我々の会話とは別物で、「話しことばを借りて、第三者に意味が通じるように完成した書きことば」である(野間、2014)。加えて、リアルな会話は当事者同士で作るものだが、創作物の会話シーンとは会話を装って作者の意図を読者に伝える装置、すなわち「読者に見せるための疑似会話」なので、当事者間なら必要のない状況説明も入れ込まれる。したがって声の個性もイントネーションも聞こえず、表情変化も見えない小説会話文を訳す時は、その欠如を補うためにも役割語で言語資源を駆使し、情報を付加する必要がある。

韓国語は敬体・非敬体は種類豊富だが男女の語法はほぼ同じなので、女性登場人物の語尾「～わ」の使用有無は翻訳次第となる。拙訳『らぶきょん』初期の「女ことば」は、①高位人物の品位を示す時、②ギャグシーンの小道具的に使用されるという指摘を頂き(因、2007)無意識の語法選択だったが光栄である。訳了した今確認すると、2008年以降の刊行分ではヒロインら女子高生・大学生には、上記以外でも「～わ」を使わせていた。

- ③ 【偽装】上品さや冷静さを装ってマウントする時。シニカルな言説を伝える時。
- ④ 【支配】自己主張や冷たい怒りを伝えて、相手を動かそうとする時。
- ⑤ 【自省】内心の気づき。不本意だが心から認める必要がある時。(動揺・詠嘆・照れも含む)
- ⑥ 【無力感】不本意な事態をコントロールできない時。やけっぱちな時。
- ⑦ 【親しさの解消】相手と距離をおく時。

普段は主体的で行動力のある登場人物が、時に「無力で感情的な女」に該当する瞬間には「女ことば」を選ぶほうが、訳語として伝わりやすいという判断であった。

なお、「～わ。ぶちのめしてやる」と、前後の言葉で落差をつくって効果を狙う「セット使用」もある。

ドラマ化された時代小説『太陽を抱く月』には、『男・儒学・論理 vs 女・無学・巫術』というジェンダー対立がある。しかしヒロインの令嬢は女に禁じられた読書を続けた結果、学びで得た聡明さと見識で王を魅了し、ジェンダーの壁を突破する。一方、令嬢を陥れた利己的で浅薄な王女は、小説終盤で実兄たる王から処罰され、その罪を償うことになる。

だが朝鮮最高の教育を受けた兄が王法と儒学を基準とし、教育機会を奪われた王女を裁くのは不当だという作者の陰の声も読み取れる。それで誤訳にならない範囲で王女に寄り添った訳出を心がけ、出版後に「王女が可愛かった」という読者評を聞き、幸甚であった。

文字の普及にともない学問で世界を把握する男性社会に対して、作中の老巫女は「天に舞いを捧げ、胸中のしこりとなった思いを『語り』によって他者と共有し、皆がともに嘆き、つらい思いを安らげる女性社会を、女性自身が誹謗することのないように」と遺言する。

最後に、「異文化に知識も関心もないが、本は読みたい」読者を対象に翻訳する場合、原書では違和感なかった部分が、翻訳国の文化においてはつじつまが合わない・不自然な論理展開に見えることも多い。そういう際は、日本文化の知識蓄積の薄い英語圏読者のために「訳者側でつじつまを合わせる」（バーンバウム、2006）方法には共感する点が多い。翻訳とは表面的な言葉のおきかえではなく、「文化翻訳」を目標とすべきことを実感させられている。

【参考文献】

- 因京子（2007）「翻訳マンガにおける女性登場人物の言葉遣いについて——女性ジェンダー表示形式を中心に——」『日本語とジェンダー』第7号 pp. 6-18.
- 野間秀樹（2014）『日本語とハングル』文春新書.
- アルフレッド・バーンバウム（2006）「日本の小説を活性化する：先端文芸翻訳のこころみ」岩波書店編集部編『翻訳家の仕事』岩波新書 pp. 203-208.

【作品】

- バク・ソヒ『らぶきょん～LOVE in 景福宮』全28巻 拙訳（新書館、2006～2012）.
- チョン・ウングォル『太陽を抱いた月』上下巻 拙訳（新書館、2012）.

（さじま あきこ・福岡女学院大学教授）